

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

社会の変化が目まぐるしいが、医療の世界全体も、この日本消化器外科学会にあっても変化は著しい。本学会誌も医学系和文誌としては本邦初のペーパーレス化されて1年半がたつ。また、投稿も電子化されて2年余りたつ。学会誌のペーパーレス化はJ-STAGEの検索機能などで容易に目的の論文にたどり着けるし、画像のカラー化で情報量も増加した。また投稿の電子化システムで、コンピューターに原稿や画像などを入れれば投稿もかなり容易になっていると思われる。これらの変化は好ましいものと思われ後戻りはない。変化のキーワードは“電子化”であり“インターネット”であることは言うまでもない。

しかし、ペーパーレス化した雑誌の中身はネット上で自分から開けないかぎり接することはない。このためチェックする習慣がなかったりすると素通りしてしまう。一方では専門外の内容などを見る機会も少なくなってしまうとも考えられる。ネット上に氾濫する情報の中で必須なものをリスト化し定期的にチェックする習慣の有無で情報の格差が生まれる。学術集会の冊子版抄録号もなくなり重い雑誌を学会場に持ち運ぶ必要がなくなった。しかし、学会場で配布されるプログラム冊子だけでも事前の手に入ると全体が見渡せたり、ネット上での抄録検索がしやすかったりと感じている方も多いと思われる。ネット情報を活用するためにもアナログあるいは紙媒体との相補的な発想が必要な気がする。

本編集委員会で新たな疾患概念や病態の投稿が議論されることが多い。同様の報告が出たばかりの本誌に載っていたり、他誌の近刊に発表されたりしていることが、検索が容易なためしばしば判明する。時間的な差はわずかな場合もある。このような場合には比較的まれな報告でも採用されないこともありうる。ネット時代にはやむをえないことである。

若い消化器外科医の投稿が多い本誌だが、電子化で投稿から採用までの時間はかなり短縮されていると思われる。しかし、初回の投稿で採用される論文はまれである。論文として主張すべき点が明瞭でないものや、必要な考察がなされていないものから文脈・字句の訂正までさまざまである。投稿が電子化され容易になっても再投稿・再査読にはそれなりの時間がかかる。また、査読に返答するのもストレスである。自分の論文を早く世に出すためにも、書き上げた論文の“送信”ボタンを押す前に、完成したPDFを昔ながらに紙に印刷し自分自身と共著者の目を通してチェックすることは必須である。このアナログな作業が再査読を減らし、早期の“e-pub”に繋がると思われる。アナログあるいは紙媒体との相補の発想がここでもポイントと考えられた。

(橋本 雅司)

2012年6月1日